

白いトラヴェルソの 赤いハーブ



吉高 雅美

見捨てられた神殿

右手にタイマツの明かりっぽく指輪がクリームグリーンのやさしい光を発している。閉所恐怖症なら息の詰まってしまうような闇がそこだけ指輪の光で消されていた。

革の量の少なめのジャケットの胸ポケットから、なめし皮に殴り書きされた地図を取り出し見ている。洞窟は右と左とに続く分かれ道であった。ちょっとだけ考えた。考えたふりかも知れない。そして、自分勝手に頷くと右の道へと進んでいった。

「便利なものね」

祭壇の間と地図にある広い真四角に区切られた部屋に着いたのだ。部屋に入ると闇に閉ざされていた部屋全体が淡く明るくなったのだ。どんな魔法か知らないが、この部屋では、他に手元を照らすための明かりは必要なかった。

壁は、つたの様な、柱の様な、レリーフで飾られ、床には特別な石のタイルが敷き詰められ、ドーム状に湾曲した天井は十分な高さがあった。正面の一番奥に祭壇がある。水の精霊に祝福された剣が、そこに納められているはずだが、今は祭壇の手前に何かがあって、視界を遮っていた。

コツコツと足音だけが反響した。近づいて見ると視界を遮っていたそれは、氷の塊であった。さらに、よく見ると、少し身を屈めた人がその氷の中にいた。顔を見る、目玉が動いた。

「なんだリュウ君生きてるじゃん」

「あのう、とおっても遅いんですけど」

「喋れるじゃん。早く自分で、そっから出てきたら」

全身が氷の中にあるにしては、目も動き、言葉を話すことも出来るようであった。

「内側からは、びくともしないのよ。たぶん、外から力を加えると、壊せると思うんだけどなあ。そんな、腰振ってないでいいから、早く助けてくれよ、クルミちゃん」

クルミは歌いだした。

冷たい氷に 封印されたのは
誰のせいだと 言うのでしょうか

ここまで
やあっと
たどりついたのに

リュウ君の
回りの 冷たい氷が

寒くもないのに震えて
暑くもないのに汗かいて

ここを叩いて砕いたら
全部一緒にぐちゃぐちゃに

「ひろい牛タン」：クルミ

クルミは氷柱を砕いた。

クルミが戦士でリュウが魔法使い。それなりにバランスの取れたペアかも知れない。この洞窟の精霊のダガーのことを知り、地図が手に入って、洞窟の入り口までは一緒に来たのだが、方向音痴のクルミが地図と真剣に、にらめっこしている間に、リュウはすたすと先に祭壇に着いていたのだ。置いてけぼりを食らったクルミが、やっと祭壇に着いてみると、リュウが氷柱になっていたのであった。

砕けた氷の下でリュウがもぞもぞ動き出した。

「ちょっと、乱暴だよ。いくらなんでも。何回殴った、その剣で。氷柱が砕けるよりも速く斬りつけたよね」

首を左右に振り、腕を軽く回す。

「でも、まっいいか。ああ、自由はいいなあ。そうそう、そのダガー、取ろうと手を伸ばすと、氷になっちゃうよ。どうしたら、氷とならずに取ることも出来るか考えるから、少し待ってね」

しかし、そうリュウが話した時には、隣に氷柱が出来ていた。

「ご忠告、遅かったかも」

氷の中から、クルミの醒めた声が聞こえた。

祭壇の間の入り口付近から、強力な魔力と炎の塊が祭壇に向け発せられた。リュウの早期警戒用の結界は、まだ唱えられていなかったが、ただならぬ気配を感じた。もちろん、リュウは逃げた。

「ったー。危なー、って、クルミ！」

火の玉は、祭壇前のクルミの氷柱を砕き、祭壇も破壊した。精霊のダガーは、祭壇から弾き飛ばされた。それは、リュウの足元に転がった。

「ふふ、こんなところに剣が。もらっとこ」

リュウは、クルミのことも、ほったらかしで、そそくさと剣を拾っていた。だって、心配して

もしなくても、今更クルミの状態が変化するものじゃあないし、剣は拾える時に拾っとかないと、拾えなくなるかも知れない。そして、砕けた氷柱と祭壇は、こなごなの瓦礫の山になっていた。入り口付近でまた、魔力の高まりが起きる。

崩れた祭壇の下、瓦礫の間、隙間から、何かしら邪悪でヨコシマな思念が、黒い陰となって這い出してきた。少しでも魔法界を知っているなら、それが危険を意味していることが分かるはずだった。剣を奉納する祭壇が洞窟奥にあることも。奉納どころか、精霊のダガーの力で何かを封印する祭壇だったのだ。

二発目の火の玉が瓦礫の山にぶつかる。いくら魔法の炎でも、石と氷の瓦礫は燃えない。入り口辺りで魔法を唱えた者は、やっと、そこの怪しい陰に気付いた。そして、陰に気付くと洞窟の出口へと逃げて行った。

やっと瓦礫の中からクルミが這い出した。火の玉を二回も食らったけれども、結局直接当たった訳ではないから、平気であった。けれども、足元には既に深い煙のような陰が漂っている。

「あははは、眉毛ない、クルミ眉毛ないよ」

「こんな時に、何言ってる」

「だって、こっち、こっちだけしか、眉毛がないんだよ」

そんなこと、知ってる。手元が狂って、片方の眉毛を剃り落としていたのだ。でも、化粧していたはず。

「それって、お化粧全部落ちちゃったってこと」

リュウは、クルミのほこりにまみれ、化粧が中途半端になくなった顔を見る。

「さあ、すっぴん、では、ない。でも、眉毛はない」

「それって、最悪じゃん」

「そそ、ところどころ、はげてるってとこかな」

「冷静に分析してどうする。こんな顔じゃ、外歩けないよ」

すねるクルミの顔を、リュウはそっとなでた。

「ねえ、今何した。何したの。何したか言いなさい」

「眉毛描いてみた」

「そっかあ。意外とやさしいんだ」

けれど、その場に鏡があったら。そして、その鏡で自分の顔を映して見たら、やさしいなんて思っただろうか。

「それより、足元見てみて」

クルミは自分の足元を見た。リュウって、こんな時まで、どうするかって考えるの。

「逃げた方、いいみたいだよ。これってさ」

「何冷静に分析してる一。逃げるに決まってるじゃん」

二人は走り出した。そして、出口。火の玉を投げつけてきたやつの姿は見当たらない。けれど、洞窟の奥からは、なにかくぐもった音と、何かを引きずるような音がする。

「どうしよう」

リュウがダガーを見せる。

「それって」

「うん。そうだよ。精霊の剣さ」

どんと音がする。リュウが魔法で洞窟の入り口を塞いだ。入り口を爆発させて崩したただけだけど。

「とりあえず、こんなところじゃ」

そんなんで良いのかな。クルミはちょっとだけ心配したのだった。けど、二人は、走ってその場を離れた。

槍なんてやりきれない

薄暗がりの路地。レンガの建物。剣や斧を振り回せる広さもある。クルミとリュウは、並んで歩かない。いつもの様にクルミがやや斜め左前に位置しながら歩いている。

「宝物は手に入ったけど。これどうしようか」

「お金持ちに売るに決まってるでしょ」

「クルミちゃんって、お金持ちの知り合いいるの」

「むぎゅ。ちらない。本部帰って考えましょう」

「本部ねえ」

「他に帰るところもないじゃん」

「それもそうか」

向かいから数人の人影が近づいてきた。剣を下げた戦士が右に、斧を担いだ戦士が左で、真ん中の男は槍、その槍に覆いがなかった。こんな街中で、剥き身の槍を抱える戦士なんているはずもない。

クルミは、ちらりとリュウに目配せした。リュウは立ち止まりそしてクルミを残したままゆっくりと後ずさりして、魔法の詠唱に備えてる。髭の槍の男が、槍を構えながらゆっくりと話しかけてきた。

「お嬢ちゃん。あんたに、さして恨みはないんだが、とある人から雇われてしまってんだな俺たち。死んでもらうよ」

クルミは歌う。

並みから食べればいいのか わんこじゃないから質は流れて
沈んでは 現れてく しもふりの笑いダケ
黄身がこんがりすき焼きしたいね
高すまきに いやと蹴りいれて
塩分大目で 砂糖も入れて 料理 こてこて

網目 あみだ あみタイツで キジを鍋にしたから
ボスキャラは 時々 おばさんパワーのママ

「ラフファイトは突破で」：クルミ

クルミは無造作に腰の剣を抜いた。ブーンと唸る様な音と刀身にまだらに薄紫の霧の様な光がまとわりついている。男達は一瞬たじろいだ。

「魔剣士、だったのか」

一瞬、一瞬のたじろぎ。それが必要だった。クルミは慣れた身のこなしで左肩から小ぶりのガ

ントレットより少し大きめの盾をはずし左手で構える。リュウは発光の魔法を男らに投げつけた。男らは、まばゆい光の渦につつまれた。この光の渦は、数秒続く。クルミは盾を掲げ槍の男に一步踏み込んだ。

しかし、それは、光の渦にまったく怯むことなく繰り出される槍の動きと同時であった。クルミは盾に助けられた。槍は盾を貫くことはできぬまま、盾ごとクルミを吹き飛ばした。リュウはあっさりと弾かれるクルミを見て、とっさに詠唱を変えた。

「なんで、風の魔法」

風の魔法で軽くなったクルミを、リュウはつかんで、走って逃げる。男らは、さすがに光の渦をまといながら走ることができなかつたみたいだ。分かれ道、右へ左へ、追ってくる気配が無いと分かって、一息ついた。

「弱いなあ、クルミちゃん。それでも魔剣士なの」

「魔剣士だから、魔法唱える時間耐えられたでしょ」

「なるほど、それも一理あるね」

とりあえずリュウは納得したみたいだった。

ピグリじいさんの店

裏から見るとちょっと傾いている感じだけど、正面はは、ちょっとしゃれた入り口。中は暖かく、中からは陽気なざわめきが聞こえる。明かりがもれる。ちらりちらりと人が出入りしている。クルミとリュウは、その店の扉を開け中へと入っていく。

喧騒だった。小太りで体格のいい二人の男がにらみ合っている。野次馬は勝手に、やれやれやっちまえとか言ってるみたいだ。店を壊されては、でも、あんなやつらに出てけとも言えず、ピグリじいさんは、ひどく機嫌が悪そう。クルミは、うんざり顔のじいさんと目が合った。

「どこ行っていたんだ、こんな時に」

こんな時、こんな時って言った？ まじ。喧嘩がいつ起こるかなんてワカンナイジャン。

「でも、間に合ったからいいじゃん」

ここは、二人が本部と呼んでいるピグリじいさんの店。二人はこのこのやっかいになっている。ちょっとした用心棒みたいな役目で、それで、まかない飯なら、ただで食わせてもらっている。三階の隅の部屋、屋根裏部屋だけど、住まわせてもらっている。本部、支部はまだない。

にらみ合う男に、クルミが、すたすたと近づく。

「やめなよ、店中で喧嘩なんて。迷惑じゃん。勘定払って、外行ってやって」

「なんだと、ガキは引っ込んでろ」

いつの間にかクルミの隣にいたリュウは、かるく手を広げると、火の玉を呼び出していた。ふわふわ浮かぶ火の玉。

「ガキって、ぼくのことかな」

小太りの二人の男の顔から、さっと血の気が退く。

「ま、魔法使いかよ」

クルミは腰に手を当て、勝ち誇った様に言い放つ。

「分かった。さっさと出て行きな」

「な、なんだ、てめえは、さっきから」

せっかく、退いた血の気が戻ってしまった。クルミは、そっと剣の柄に手を伸ばす。それを見たリュウは大慌てをし始めた。

「だめ、ダメだよ、クルミちゃん。剣握っちゃだめだって。ここ店の中だよ」

リュウは男らに向き直り必死に言う。

「早いとこ勘定済ませて、その子にも謝って、店出た方がいいよ。早く、早くしなよ」

「なにに」

訳のわからない男らは、慌てだしたリュウを見て、リュウのことをナメだしたようだった。

「この子に謝るって、はは、笑わせるな」

店の常連は、にやにやしなながら、巻き添えを食わないように、距離を取って見ている。けれど、そうじゃない客は、あの子やられちゃうよって思っているみたいだった。

「だから、だめだって。あ、ああ」

クルミは柄を握った。魔剣「月の雫」。小ぶりのフランベルジェ、混沌の魔剣。

「だから、どーだって。どの子、あの子、あたいのことかよ、みたいな。愚だ具だ言ってるんじゃないよ」

剣を抜く。淡い紫の光に包まれた刀身。クルミは、剣を構えるどころか、既に二人の男を切り刻んでいた。殺すつもりなんて無い。だから、身につけている、ジャケットやらパンツやらベルトやら、担いでいるザックやら。

ぱらぱらボサボサ、文字通り、身包みはがれだした。

「え、ええっ」

どさ、っと残りが身体から剥がれ落ちる。

「かかかか」

「どーしたんだよ。まともに喋れないのかよ。今度はどこ！ 耳、鼻、指、腕、足どこでも、望みのとこ、そぎ落としてやるよ」

「ま、魔剣士なんて、聞いてないよ」

男は泣きそうだった。

「じゃかましい。あたいは、血に飢えてるんだよ」

ささっと目にも止まらぬ速さで剣を走らす。男らの前髪がはらりと切れる。

「ひ、ひーっ。こ、殺される」

男らは裸のまま逃げ出した。クルミはその場で、月の雫をめちゃくちやに振り回しながら、およそ文字に残せないような罵声を逃げる男らに浴びせ続けた。

「あ、あの、クルミちゃん」

「なに！」

「もう、その剣、しまった方がいいんじゃないかな。あいつら、もういなよ」

「もう、お終い。つまんないじゃん。あたいは、何か切りたいの！」

「何かって…… しかたない」

そう言うと、リュウはゆっくりと後ずさりし始める。

「リュウ。どういう意味だー」

リュウは目をそらし、聞こえるようにつぶやいた。

「刃物持つと、性格変わりすぎ」

「なんだって！」

クルミは剣を鋭く振り回しながら、歌いだした。歌う剣舞。

戦いのゆくえ 終わらせるつもりで
敵が弱すぎ 汗もかかず人も斬れない

荒くれどもだって 期待していたのに
ちよっとなでただけで 消えちゃう

信じられないけど
死んじゃってないんだから 逃げんなよ

戦いの最初は怒りじゃないよ
ずっと楽しくわくわくするんだ
たどり着けない思い出迷子は どこに行ったの？
黒い手帳にメモったみたいに
ちょっと意地悪に秘密にしたいよ
どこに 斬りつけるんだ ... 映し身ってやつ？

切り裂くたびに 死んじゃうだって
わかんなくなる 昼間の太陽
はっちゃきこいて 振り回すから
... 行くあてはあるの
あの事実を肯定するのには
ちょっと夢短いでしょ？
忘れてやる あいつの母さん出べそ

「あげいも」：クルミ

沸き起こる拍手と歓声に、クルミは気分が良くなった。

「で、結局さ、どうするの」

「うーんそうね。バイソンに聞きに行きましょう」

「バイソン？」

「そそ、友達」

「ああ、またそれか」

「それかって、どーいうこと」

「あ、いや、なんでもない」

リュウは考えるふりをしてクルミに気付かれないようにポケットからコインを取り出した。

(表か)

「でも、よさそうだねその考え」

「でしょう。いつでも、うちの考えは冴えているんだから」

魔剣士じゃないかも

「誰かいる。変な感じがする」

バイソンの家についてののだが、小さな明かりが戸から漏れている。中がかすかな音がする。

「どうせクルミちゃんの友人だからだろ」

クルミはゆっくりと首をふった。

「おかしいよ、いつも一人なんだから」

「そっちな」

中から小さな呻き声がある。

「早く楽になりたいか。なら、おまえの持っている情報とやらをよこしな」

戸の隙間から中の様子を探る二人。ぼんやりとした部屋の中央には、椅子に縛り付けられた初老の男がいた。呻き声はその男が発している。背中ごしに薄ら笑いを浮かべるキザな男が黒いマントをたくし上げその左手には小さな刺殺用のナイフが握られている。無造作に背をつつと刺す。

「ううっ。で、でも」

「でも？ 何だ」

「あれは、あれだけでは、何の意味もない」

黒マントの男の笑みが凄みを増す。

「その心配は無用だ。よこせ」

諦めたのか、本棚を指さした。

「はは、最初から素直にそうすれば、痛い思いをしなくて済んだのに、おれは、あんたの命に興味はないんでね」

本棚へと向かう、マントがひらり、腰に剥き身の剣が無造作に吊るされている。でも、見えた。その剣が淡い光に包まれているのを。それを目にしたクルミは、無言でリュウの腕をつかむとぐいぐい引っ張ってその家から離れはじめた。リュウには訳が分からないようだ。ピグリじいさんの宿。クルミとリュウが、本部って呼んでいる部屋に戻るまで、クルミは一言も話さない。

部屋に入り、ドアをしっかりと閉じると、やっと口を開いた。

「ふう」

「ふう、じゃないよクルミちゃん。どうしたの。いったい、って彼を助けなくて良かったのかよ」

「助けるって、どーやって。あの黒マントの剣見たでしょ。魔剣、魔剣だよ。あいつ、魔剣士じゃん」

クルミは思い出して、ひざがカウカク震えた。

「クルミちゃんだって、魔剣士じゃん。その腰の混沌の魔剣「月の雫」は伊達じゃないじゃん」

月の雫。小ぶりの細身のフランベルジェ。片手でも容易に扱えるほど軽い、触れる物を鋭く

切り裂く。リュウはクルミが何度も淡い光に包まれたそれを使うところを見ている。

「魔剣でしょ。魔剣使えるなんて、魔剣士じゃん」

魔剣士じゃない普通の人間には、魔剣を扱うことなんて出来ない。逆に魔剣に取り込まれてしまい、魂を吸い取られることになるらしい。

「だからさあ、うちは、そなんじゃないんだってば」

「魔剣士じゃないの、それじゃどうして魔剣持ってるの、って魂吸い取られないの」

「これは、うちの師匠の剣なの」

クルミの師匠は高名な魔剣士だった。

「師匠から剣を譲られるぐらいすごい腕なんですよ」

「だから、違うってば」

クルミは困ったように歌いだした。

ああ、つまづいたのに
誰かもつまづいて転んだ
た一すべってころんで
ちまきがいいと云っていた

おお、晴れ渡る空の下
波も静かで
ぞーっと、ソウが繰り出した
その鼻が長いと困った

取ってつけた、木枠の戸棚に
負けない魔剣をかくしてしまう
そっとぺこばこで
きゅるきゅるしてくるけど
ただ、生きていたよ

「ライブ」：クルミ

「という訳なのよ」

「なあんだそういう事だったのか、って分かるかそれで」

クルミは、ぼそぼそ話す。確かに弟子にはなれたのだが、ろくに剣について教わる前に師匠は死んでしまった。

「誰にやられたの」

「誰って、別に。普通に老衰って言うか、熱出て、一晩もたなかったっていうか」

その時、熱にうなされてもうろうとしながら、おれの財産を全て授ける、なんて言ってたわりには、剣ぐらいしかまともな物なかった。大切にしろって渡されたって訳だった。

「渡されたって、それでどうして剣に取り込まれないんだ」

「それが、なんか、なつかれているっていうか、好かれているっていうか」

クルミはそう言って、腰から剣を外し、ぽいと放り投げた。すると、剣はもぞもぞ動き出し、クルミの足元に。

「そ、それって」

「ねっ、なついているでしょ」

「呪われてるだけじゃん」

魔力の宿る物を、その魔力が何なのかを判明する前に、うかつにその本来の用途に使用してしまうと、呪われて、使用者から離れなくなる。

「ええっ、そうだった。どうしよう」

「どうしよう、って言っても、逆に剣の魔力を判明してしまったら、魂が取り込まれちゃうじゃん」

「そっか」

「そっかって、そういうことなら、混沌の魔剣じゃないってことかな。何の魔剣か分かってなかったってこと」

「そうかも知れない」

「じゃあ、剣の腕も、魔剣士レベルに程遠いってことなの」

「ううん、たぶん、弟子にはしてみたくなるぐらいの腕って言うか」

それで、本当(?)の魔剣士相手になう訳もなく、無言で逃げたのだ。本当の魔剣士が相手では、クルミは一瞬で切られ、返す刀でリュウも切られるだろうし、つまり、魔法を唱える間すらないだろうから。

「ね、逃げて、正解」

クルミは自慢げににこにこした。

「それじゃ、とりあえず、お腹すいた」

「そだ、喧嘩してるの上手く納めたんだからさあ、なんかいい物出してくれるよね、ピグリじいさん」

「さーどうだか。でも、お酒ぐらいサービスしてくれるかも」

「わーい」

「喜ぶのかよ」

「言ってみただけ」

盾職人のバイソン

三階の部屋から、一階の酒場へと降りていった。酒場は、いつもの様にざわついている。カウンターにピグリじいさん、奥の厨房に奥さんが料理してるはず。二人を見つけるとピグリじいさんは機嫌よさげにアゴをさすった。

「よう、やっと戻ってきたか。暴れた後でも、お楽しみだったのかな、ひゃひゃひゃひゃ」

「うへえ、下品な笑い。それに、うちら、そんなんじゃないし」

「そんな若いのに、いつも一緒なのに、どこか具合でも悪いのか」

じいさんやぼだぜとか、とぼけてるに決まってるじゃねえかとか、勝手に話し盛り上がってる。でも、なぜだろう、そんな気おきないって、どうなっているんだか。

「でも、あれだ、あの剣持ったクルミちゃん見たら」

「おれは、ごめんするね」

「なんかあったら……」

「チョン切られちまう」

大げさに股間を押さえる。ここで笑い。いつもそのオチかよ、酔ってる定番ネタになってる。

「そだ、今日は特別、店のメニューから、ピグリスペシャルセットと上等のワインを付けてやるよ」

「おお」

リュウが歓声を上げた。

「ピグリじいさん、やっぱ話し分かる」

そんなリュウがおやって顔した。

「どうしたのリュウ君」

「あの、カウンターの隅の人、さっきの椅子に、部屋で」

リュウが指差したのをピグリじいさんが気付いた。

「盾職人のバイソン、知り合いかい」

「いや、僕は」

「バイソン！ 大丈夫だったんだ」

クルミはバイソンに駆け寄り、ハグした。バイソンはちょっと頭をかしげた。

「大丈夫だったって」

「ああ、なに、ひさしぶりってこと、元気だったってことで」

「ははは、そうか。クルミちゃんはいかわらず、元気いっぱいだね」

ちらりと、クルミの肩の盾に目をやる。

「ずいぶんと荒っぽいことしてるみたいだね。盾も万能ではないから」

「はいはい。忠告ありがとでふ。でも、この盾すごいねー、あんまり丈夫で、盾より先に、うちが壊れちゃうみないな」

「なんかあったの」

「そそ、槍でドーンって。盾でガシンって。そしたら、盾は大丈夫だったんだけど、盾ごとわた

しが、どっかーんって」

「あはははは、ドーン、ガシン、どおっかーん。おれにも分かるように話してくれよ」

「ああ、そうだ、いっしょに食べよう。今日はピグリススペシャルセットとワインのディナーなんだから」

「ほう、よく分かんないけど、豪勢だね。じゃあご馳走になるかな。こちらのお兄さんは」

「ププ。お兄さんって年じゃないんじや。リュウ君、私のパートナー。こう見えても魔法使いなのよ」

「おやおや」

「リュウといいます。はじめまして、バイソンさん」

「はじめまして」

「あなたが、クルミちゃんの盾『アルマジロ』を作った人だったんですね」

「そうだ、二三年前かな、誕生日のプレゼントさ」

三人でテーブルに移った。ワインの前にビールにした。フライドポテトが出てくる。ぱくつく。

「実はさー、バイソンに会いたかったんだ」

「ほほう。おれも、なんか、しけたこと続いて、ここにきたら、クルミちゃんの顔でも見れるかなって思ってさ、ほら、前に本部決めたって言っていたの思い出して」

「そそ、本部。用心棒？ やってる」

「ああ、それは良かった。やっとまともな仕事見つけたんだ」

リュウ君、頭をかきながらボソリと言う。

「まとも、かな」

クルミが、リュウの足を蹴飛ばした。

「ああ、そ、それで、他にも、トレジャーハンターもしてて、ぼくら」

「パートナーって」

「うん、仕事のパートナーなのよ。って、リュウ君は、うちに寄生してるんだけどねー」

リュウはふにやりと笑う。

「まあ、寄生か。そうかも知れないね」

「何、それ、そうかも知れないねって、だれのおかげで食事に、屋根のある部屋、魔法の呪文書だって、リュウ君一人じゃ手に入れられないでしょ。ほんと、何にも出来ないんだから」

リュウは、ただのフライドポテトなのに、ぼろぼろこぼしながら食べてる。

「フライドポテトもこぼさないで食べられないの」

バイソンはゆっくりとうなずいている。

「リュウ君とやら、まっ、クルミちゃんをよろしく頼むよ。おれの娘みたいなもんだから」

「そそ、うちは、バイソンの娘さんに似てるんだって」

リュウはクルミとバイソンを見比べた。

「ああ、年が似てるってことみたいな」

「そーだな。娘が生きていたら、ちょうど、クルミちゃんぐらいのはずなのさ」

鶏肉の丸焼きが出てくる。ぱくつく。ワインもきた。ごくごく。リュウは、そっと精霊の剣を取り出し、回りに気付かれないように、バイソンに見せる。

「実は、こんな物を手に入れたんです」

「ほほう。すごい物持っているんだね」

「えーバイソン、見ただけで分かるの」

リュウは、ちょっと重そうにクルミの肩から盾アルマジロを取ると裏返す。

「ほら、ここに、白金で複雑な模様の様な細工物が埋め込まれているだろ」

確かに、盾の裏に、付いている。アクセサリーにしては変なのって思っていたんだけど。

「これは、クルン文字を模った細工なんだよ。この盾は、物理ダメージも魔法ダメージも防ぐんだよ」

「すごーい」

「こんなことが出来るのは」

「えええ、バイソンって魔細工士だったの」

「おやおや、言ってなかったかな。でも、皆にはナイショだよ。魔細工は..... 副業だから」

食事も終わりかけたころ、バイソンは紙を取り出すとさらさら何か書き出した。

「これを持って、北の薔薇都に住む『水の精霊マスター』クラウドに会ってみな。やつなら、興味を持つかも」

「どうして」

「それは、水の精霊の剣だろ」

「そっか。で、これは」

クルミは紙をひらひらした。

「ふふ。紹介状だよ」

「すごーい。やっぱ、バイソンに相談して正解だったよ。ね、そうでしょリュウ君」

リュウは考えるふりをしながらポケットからコインを一枚取り出した。

(裏か)

「でも、止めた方、いいかも」

「なにをいう。自分じゃ、なーんにも考えないくせしてー」

リュウとバイソンは思わせぶりに目配せしてる。

「やな感じ。男同士で見つめ合っちゃって」

「ふふふ。まあ、とりあえず、行ってごらんよ。そんなに邪険にも扱われないだろうから.....
そうでもないかな」

「どっちだー」

「クルミちゃん、酔った？」

薔薇都へ

空は晴れ渡っていた。薔薇都までは、歩いて半日以上かかる。ってことは、クラウドが親切に屋敷に泊めてくれないと、野宿。

「野宿なんて、いつものことじゃん」

リュウって、いつも変わらない。冷静なのか。いや違う、ぜったい違う。

「鈍感。無頓着。無神経」

クルミは歌う。

ちびけた光を 雲間に散らし
朝焼けの大地にうずくまる
背中小突いてせつなせつなに
あさってに行けたなら笑っちゃうジャン

水も冷たくなって
まじ冬だったりしてる
そろったそろった都へ
ゼニに近づける瞬間がくる

「行きな果て」：クルミ

「ねえ、その剣売れたら何買おうか」

「まず、生活の安定が先なんじゃ」

「むぎゅ。現実。リュウ君って夢ないなー」

ピグリじいさんの店で、リュウ君の聞き耳の魔法で、クルミが見捨てられた神殿の話しを聞いた。

— 南の、中の沢の山のふもとに、見捨てられた祭壇があって、そこに精霊の剣が眠っている —

それを、リュウに話す。こそこそ。

「どこの客」

「あそこの二人組み。ちょっとまって」

クルミは集中した。

「地図も持っているって、あの帽子の方が」

「うーん」

「どうしよう」

リュウは考えるふりして、ポケットからコインを一枚取り出す。

(表か)

「そうだね、たぶん、いい話した」

「わー、で、どうする」

「そーだな。って、どーしたいの」

「もち、地図を貰って、うちらが、精霊の剣を貰って、売って、大金持ちじゃん」

「貰って、貰って、大金持ちって、そんな虫のいい話しが」

「そーするの。リュウ君、考えるの好きでしょ」

「じゃあ、クルミちゃん、あそこで、大げさにコケて、皆の注目集めるように」

「よーし」

クルミは大張り切りで、数人を巻き込んでコケた。

「はですぎ」

リュウの眩きなんて、だれも気にも留めない。丁度、帽子の男が取り出していた地図を、そそくさとリュウが盗んだ。いや、貰っただけ。黙ってだけ。そして、コケたクルミを介抱するように、部屋へと。ただ、その前にリュウは「ちょびっとバーサク」興奮する魔法を店にかけていた。

さて、帽子の男は、地図をもう一人の男が取ったと思ったと思う。コケたクルミの回りの喧騒と、二人の男に争いが喧嘩になるのに「ちょびっとバーサク」が効いて。たぶん店はメチャメチャ。でも、その時には、二人で中の沢に向かっていたのだった。

「大金持ちか。なったところで、楽しいかな」

風は冷たかったが、日差しは優しかった。

「なに言ってるの。なったこともないくせして」

リュウは少し暗い顔した。遠くに見える山にはうっすら雪が積もっているみたい。白いし。

「そう言えば、リュウ君って、あたしと会うまで何してた。聞いてなかったよーな」

リュウは、ふにやりと笑った。

「なーんにも、なんもしてない。魔法以外」

「ふうーん、そーなんだ。って訳ないだろー」

「あはははは、クルミちゃん、考えるの苦手だよー」

「それは、ほっといてって言いたい」

大きな川だった。水もゆったり流れている。川に面して、向こうに大きな屋敷、お城じゃん。

「この川、渡るの」

「うん」

「うち、泳げないよ」

「泳がない、泳がない。あそこ、あそこに、向こうへ渡してくれる船があるから」

クラウドのお城で、バイソンの紹介状はとっても役にたった。丁寧に応接間に案内されるし、食べ物とか飲み物とかくれたし。

「おいしいけど、これじゃお腹いっぱいにならないね」

「えっ、これは、おやつだよ。お茶のおつまみ。まあ、お茶じゃなくって、コーヒーっていうかエスプレッソだけど」

「エスプリでしょ。わたしだって知ってるんだから」

「うう、クルミちゃんには、エスプリは似合わないと言うか、どっちかって言うと」

「どっちかって言うとなによ」

「トタバタ」

なんか偉そうな人が出てきた。リュウ君が立ち上がる。

「はじめまして、クラウドさん」

リュウの言葉を手で制した。

「私は、クラウド、主人ではございません。いま、クラウドは、やんごとなき事情で出かけておりまして。内容は私がお伺いいたしましょう」

リュウとクルミは、事情を話し、剣を購入して欲しいと告げた。もちろん、盗んだくだけは省いた。そして、連絡が取れるまでの数日、お城に泊まることになった。もち無料で。

「主人に連絡がつかしました。主人が言うには、お二人にその剣と一緒に、今自分のいるところまでお越し願えないかとのことでした」

クルミは小声でリュウに聞いた。

「お越し願うって、どーいう意味？」

「たぶん、命令。自分が今いるところに、お前らがこいって云う事だと思うよ」

「そーでは、ございません。私どもの馬車でお連れいたします」

「聞こえていたのかよ」

「そっちかよ」

ここがどこ、聞きたくもないかもってとこだった。馬車で連れてこられたところ。そそ、あの洞窟神殿だよだった。山だし、木が生えてるし、道だし。けれども、両腕を腰に当てた、さも、自信だらけですって背中が気に入らない。ちらりと、こっちを見た。おやおやの顔。この威張ったやつが水の精霊マスター、クラウドだよ、たぶん。

「君らかね、その短剣を神殿から盗んだのは」

なんのことかしら、そう…… とぼけないのかよ。

「あ、あ、あの、し、し、知らなかったんです。クラウドさん、え、えっと、始めまして」
クルミは思いっきりリュウの足を踏みつけた。なんで、まったく、無反応。

クラウドは鷹揚な仕草で指差した。

「あそこの奥に潜んでいる。私を恐れて、大人しくしているが、君らにあのものが、どれほどの悪夢を撒き散らすものなのか、分かっているのか」

すずめがチュンチュン鳴いている。どんよりとした曇り空。こんなところにも、野次馬っている。ちにたいのかよって感じだった。

「悪夢？」

ふにやっとクラウドは笑った。クラウドが手をさっと振ると、ひとつまみの雲が降りてきた。雲って、霧の塊？ じゅ、ジュ、じゅうって音がする。木々がざわめく。蒸発する水分。

「燃えてもいないのに、なんでだー」

「燃えていないって、クルミちゃん、あれってたぶんね、火にまつわるモンスターだと思うよ」

「ひー、って言えってこと」

「そっちかよ」

「じゃあ、どっちなの」

「たぶん、あっち」

「なにー、それー、しゃれ、ねえ、しゃれ言った。リュウ君ダジャレ言ったの。暑いから、あっちって。ださー」

クラウドは、呆れ、見下した目を向けている。

「君らは、本当に神殿の罠を解除できたのか。って、こんなの解除されたのか、私の罠は」
そして、深く落ち込んだ様だった。クルミはリュウに小声で呟く。

「ねね、罠って何。リュウ君、解除なんてした」

「氷柱なっちゃうやつのことなんじゃないかな。解除って言うか、神殿壊れたし」

「そっか」

しかし、クラウドは鷹揚な態度は変えず問う。

「参考までに、話しなさい。どう、解除したのだね」

「うーん、そうねー。話すのは、話してもいいけど、ここまで来るのに途中まで旅費も自腹だったし……」

クラウドの表情が少し陰る。さっと、どこから出たのか、金貨が数枚握られいた。

「これで、足りるかな」

「もち、そーこなくっちゃ。ええと、解除だよ。それは、リュウ君、説明してあげて」

「それは…… 神殿の罫なので、神殿そのものが破壊されると、効果がなくなる」

クラウドは笑い出した。

「あはははは。それが、その手があったか。うんうん、なるほど、それが」

ぶつぶつ言いながら、何度もうなずいている。

「今度は、神殿そのものを守る罫も設定するか」

「今度。今度って言った？ どういうことかな。」

「精霊の剣を渡しなさい」

「クルミとリュウは同時に叫んだ。」

「えっ」

「早く渡しなさい」

「なんで、なんで、短剣を」

「あの忌まわしきものを封じるには、それが必要なのだ」

「でも、でもこれは、うちとリュウが苦労して手に入れた物だし」

「ふむ」

クラウドは考えるポーズをした。

「ふん。精霊の剣、買取はしない。けれど、あれを封じるには、剣は必要だ。おまえらは、剣を手放したくない」

クラウドとリュウがゆっくりとうなずく。

「なら、決まりだな」

クラウドの回りにすぎまじい魔力の環流が起こる。

「洞窟の神殿を復活させる。そこへ、あれと、お前らとを封じよう。剣を自分たちの物としたいのならば、あのものを二人で倒すのだな。お前らが逆に、あのものに倒されたら、私はそのまま、剣とあのものを神殿に封じよう」

クラウド、水の精霊マスター、なに言い出す。そうしてる間にも魔力の高まりが増えている。

クラウドは歌いだした。

あいつはちゃっかり 姿を現し
防ぐことでも マスターでやっ
壊れた神殿 復活して
うちらもいっしょに 封印される

永遠に過ごせぬからは いつかは果てる
うちら二人が 生き延びるならば
あいつ倒して 短剣手に入れ

そんな都合よくめでたしなるかな

「永遠に過ごせぬからは」：クルミ

クルミの歌が終わるか終わらないかの間に、空間が大きく歪み、あれも、クルミもリュウも、元通りとなった洞窟の神殿へと閉じ込められていた。

数日前に見たはずの部屋だけど、もう何年も経った気がする。あいかわらず部屋はぼんやりと明るかった。なにもかもが元に戻ってって、出口ないんだけど。あら、めずらしく、リュウ君が語りだした。

「直接、やつを見ちゃいけない。目がやられてしまう。あいつは、とっても動きが遅い。目も耳も足も手もない。とっても原始的なんだ。触れると、たぶん、熱で溶かされちゃうって云うか燃えちゃうって思う」

「逃げるってこと」

「さあ」

「さあって何、しっかりしてよ」

「だから、原始的なんだって」

「だから」

「大きさが定まってないの」

「大きさがって」

「だから、自分で自分の大きさを制御しないって言うか、決まってないって言うか」

「どういうこと」

「この部屋は、クラウドの結界で、結界を越えて広がることはしないから、今のところ、最大、この部屋いっぱい大きさにはなれる可能性を持っているのさ、やつは」

「ええっ。いつ、そこまで大きくなるの」

「分かんない」

「分かんないって」

「だって、感情とか思考とか、そういうのがあるのかどうかも、法則みたいな、たとえば、叩いたら大きくなるとか、そういう性質も分かってないんだよ」

「うーん。うううんんん」

クルミは必死に考える。

「クルミちゃん、それ、向いてないって」

「うううううう」

剣に手を伸ばして、柄を握りしめた。リュウの顔にもう一つの恐怖が浮かんだ。

「僕も少しは、水の魔法使えるからさー、なんとか、動き抑えること出来るかもだし、剣でなんとかなるって思えないし」

クルミはリュウの話しをもう聞いていない。

「ムリだって！」

リュウは大急ぎで、数種類の水による防御、補助魔法をクルミにかけていた。

「どのぐらい、耐えられるか、分かんないよ。って、聞いてないし」

クルミのメッタ斬が始まっていた。すさまじい速さで切り刻んでいる。フランベルジェだから

諸刃なわけだけど、クルミは角度と速度を微妙に調節しながら、左右の腕の力加減を歪にすることによって、往復運動を繰り返し、両刃で切り続けることが出来るのだ。

「なぜだー。黒い煙になって、またくっついて、元に戻ってるよー。斬っても切っても」

「うーん、そいつを切った初めての人間だと思うよ、クルミちゃんが」

クルミは無駄な攻撃に飽きたのか、リュウの隣に戻ってきていた。

「こら、リュウ。なんとかしろ」

「切っ先で指示するなー、あぶないじゃないか」

リュウが何か呪文を唱えた。

「ムリ。凍りません」

「当たり前だろー。リュウ君に凍らされるなら、誰もこまらないだろー」

「そんな、正直な突っ込み。僕だって、傷つくんだよ」

いつ、巨大化するかわからない。剣じゃ斬っても意味がない。リュウは当てにならない。

「どーしたらいいんだ」

クルミは歌いだした

こんにちはしたくなる あの涼しさと

クラッシュアイス状態

やってこいあたいに

無意味な永遠クラウドのせいよ

クールダウン いざ 固まれよ

ボム ボム ボム

いつまで 燃えてるんだ

切り刻んで 水かけて

悪夢を 消し去りたいよ

ボム ボム ボム

「ボム ボム ボム」：クルミ

「そか、分かったぞ」

「すごいねー、リュウ君、天才」

「あの、まだ何も言ってないんですけど」

「そうだったの。でも、どうせ」

「そのしらけた目やめろ」

リュウはこそこそクルミに耳打ちした。

「あの、それ、ナイシヨ話しにする必要あるの」

「だから……」

「なーるほど」

「分かった？ いい考えでしょ」

「ぜんぜん、理解できない」

「人の話し聞くととき剣を納めろよ。クルミちゃん剣握ってるアドレナリン爆発で、思考力ゼロなんだから」

「分かったわよ、って、今の言葉。覚えときな！」

「喧嘩売ってどーする」

クルミは、しぶしぶ、剣を納める。そして、リュウの話しを聞いた。

「ばっかじゃないの」

ボムボムボム、ぶよぶよ膨らみ出していた。

「でも、他に思いつかないよ、それに、膨らんできたし」

「あ、あああああ、ああ」

クルミ、上目遣いで、リュウを見る。

「結界出せないの、リュウって」

「それだ」

リュウは呪文を唱える。膨張は止まらない。

「突破されました。僕の結界」

「もう、じゃあ、それしかないのね」

「うん、たぶん」

「でも、精霊の剣はどーなるの」

「精霊の剣どころじゃないじゃん。あれに押しつぶされて生きてるのはムリだよ」

「そっか。でも、でも、他になんかないの」

「他って。これが上手くいくかどうかも分からないのに」

「ぷぷ。本音言った。いまマジ、ピンチ思ってるでしょ」

リュウはとぼけて、天井を見てる。

「ねえ、マジ、ピンチでしょ。リュウ君の、いい考えって、やっぱ、当てにならないんだ」

「今、僕の精神状態、分析してどーする」

「ねえ、本音でしょ。分からないって、そーでしょ」

「追求するな」

クルミが月の雫を構えている。リュウが、精霊の剣をそいつに向けて放り投げた。なんか、精霊の剣が刺さっている。クルミはまた切り刻み出した。そいつは、クルミに切り取られたところが、ぱあっと黒い煙と変わる。すぐに本体と一体となって、固体化するのだが、クルミの滅多切りは、黒い煙まで、切り出した。黒い煙自体は、熱いわけでもなんでもないので、不気味だ。煙が迫ってくると、やはり、身をそらして、避ける。でも、その煙が不規則な動きをし始めて、結局、二人は上手く避けることができず、しかも、バランス崩し、コケた、いや、倒れた。リュウ

ウのいかにも大げさな台詞棒読みの様な叫び。

「ああ、あいつに、僕ら二人とも、倒された。タオサレタよ」

神殿の部屋全体がクラウドの怒りに溢れているようだった。頭の中にクラウドの声が直接響く

。

「やつに、倒されたって言いたいのか。しかたがない、私は嘘は言わない。お前らが、やつに倒された以上、私は、剣とあのものを神殿に封じよう」

魔力の環流が起こる。強烈な魔力に当てられて頭がくらくらしてくる。

「上手く立ち回り、私を陥れたつもりだろうが、そうはいかないぞ」

クラウドって、被害妄想強すぎ。

「お前らの、この件に関する一連の記憶を、抹消する」

抹消って言ったの。抹消って、抹消ってなに？

「うちは、抹茶より煎茶がいいって言うか、あの、お茶より、エスプレッソがいいというか。そんなところです」

世界がぐるぐる回り出した。

「うちらを絞ってどーする！」

クルミの叫びをクラウドは聞いてない。クルミとリュウはぐるぐる世界が回って、気を失ってしまった。

そして、ピグリじいさんの店

「うわああ、寝ちゃったよ。って、ちょっとリュウ君までなに寝てるう」

リュウはちょっと乱暴に起こされた。

「ここは、あれ、ピグリじいさんの店、って、何か面白いことかな。僕を起こすぐらい」

「ことかなって、ったく。聞き耳の魔法かかってないよー」

リュウはささやかに印を結び、呪文を唱えた。クルミの耳に情報が飛び込んできた。

— 南の、中の沢の山のふもとに、見捨てられた祭壇があって、そこに精霊の剣が眠っている —

「リュウ君、耳貸して」

リュウは素直に内緒話に耳を傾ける。

「うんうん、それって…… どっかで聞いた気がする」

リュウはちょっと考えたふりをしながら、クルミに気付かれないようにポケットからコインを1枚取り出して見た。

(裏か)

「たぶん、ガセネタだね」

「なーんだガセかよ」

相変わらず、ピグリじいさんの店は客で賑わっていた。

白いトラヴェルソの赤いハーブ

<http://p.booklog.jp/book/41804>

著者：吉高 雅美

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yositakamasami/profile>

ブログ：<http://blog.goo.ne.jp/pengincat>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41804>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41804>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.